

橋澤裕子著

『朝鮮女性運動と日本』

小久保 諭

本書は昨年三月一九日に亡くなった著者の遺稿集である。本書の構成は次の通り。

- 第一部 朝鮮における女性の開化とその闘争―三・一運動を中心に―
 - 第二部 日帝下における朝鮮人女性労働者について
 - 第三部 日本仏教の朝鮮布教をめぐる一考察―奥村兄弟の事例を中心に―
 - 第四部 新潟県における朝鮮人労働運動―新潟県朝鮮労働組合を中心に―
 - 第五部 書評・小文集
- 第一部から第三部までは、それぞれ卒業論文、大学院入試提出論文、前期課程論文で、これまで未発表のものであり、第五部の中にも活字にはならず、草稿本に掲載された

ものが多い。従って、著者にとっては、あるいは不本意な部分も多いかもしれない。しかし、著者が一貫して持ち続けた視点、あるいはこだわりともいうようなものが見えてくるように思う。以下、その点を列挙してみたい。

第一に、日本人としての朝鮮へのこだわりである。このことは、先に挙げた目次を見ても了解できると思うが、本書では第五部の中の『私の朝鮮語小辞典』（長璋吉著）への書評でもっともよく示されている。

この中で著者は一九八五年頃から高まってきた「韓国ブーム」の主流である「素朴客観主義」に潜む政治性を批判しているが、その前提となっている自分自身のこだわりを「日本と朝鮮の歴史性に由来している」としている。そして「そうした自分の『こだわり』を解決できないままにいる私などは、さしづめ、融通のきかない時代遅れの人間かもしれない」とも。しかし、植民地問題の清算がすっかりとはなされていない今日、こうした「時代遅れ」の目で朝鮮（「共和国」と「韓国」両方を指す）と日本との関係を考えていく必要性は高まっているのではないだろうか。

第二に朝鮮の女性のあり方へのこだわりである。これは第一部、第二部の論文によく示されている。

第一部の論文は三・一運動以前の朝鮮での女性解放思想の流れを追い、その上で三・一運動における女性の位置付

けを行なったものである。ここで著者は「朝鮮女性の指導者にとって、封建制からの女性解放を求めることは、即ち侵略とも同時に闘うことであった。」として、「そこに朝鮮女性に二重の苦しみがあったに違いなかった」との評価をしている。

この視点は第二部の論文でも継承され、日帝下の朝鮮人女性労働者が民族的な差別と共に、女性であるが故の多くの差別を受けねばならなかったこと、そして、それに対する労働争議等の抵抗が行われたことが示される。

男性である私には、中々このような視点は持ち得ない。たとえ、「二重の差別」に思いがいたったとしても、女性を「かわいそうな存在」としてだけ捉え、「主体的力量を持つ」た存在には捉え得ないと思う。（もちろん、女性であれば誰でもこうした視点を持ち得るという訳ではないだろうが）。

第三に、第二の点とも関連するのだが、日本女性史の欠落部分、即ち植民地支配に対して日本人女性がどのような態度を取ったのか、という点への指摘である。

この点には第一部と第三部で触れられているが、著者の評価は厳しい。特に第三部では朝鮮への真宗普及活動に従事した奥村五百子を取り上げ、「五百子をシンボルとして以後の皇民化政策は婦人たちを結集してゆくのである」と

して、積極的に侵略政策に加担してゆく日本人女性像を描いている。朝鮮人女性を通して日本女性史を再検討することを、著者は次のようにいう。（第二部の「おわりに」）

「わざわざ、戦前の朝鮮人女性について歴史的にみてゆかなければ、日本女性史の空白部分を理解できず、そして日本人としての自分の存在すらみえてこない。とりもなおさず、日本人の歴史意識の欠如を示すものである」。

ここで著者が訴えたかったのは、抑圧者としての日本人（女性）を再点検すること（というより、することによってしか）現在の日本人と朝鮮人のあり方、そして、日本人のあり方が見えてこない、ということであろう。ややもすると、被抑圧者としての面ばかりが強調されがちな日本女性史にとって、これは不可欠な視点になるのではないだろうか。

以上、本書の中に一貫する著者の視点を思いつくまに挙げてみた。これらの点は、日本史、朝鮮史に限らず、広く女性史を学んでゆく際にも貴重な示唆を与えるものと思う。個々の論文の細かい点には異論もあるが（例えば、第一部での「文化統治」の位置付けは、やや公式的なものと思われる）、本書との「対話」を通じてそれを乗り越えてゆくことが、必要であろう。

なお、本書の解題は本学の山田昭次教授が書かれている。

（橋澤裕子氏は一九八五年史学専攻前期課程修了、

小久保諭氏は史学専攻前期課程在学中）

（新幹社 一九八九年三月一九日刊 A5判 二七九頁
三二〇〇円）

立教大学史学会会則

一九八一年十一月二十九日改正

第一条 本会は立教大学史学会と称する。

第二条 本会は事務所を立教大学文学部史学科研究室内に置く。

第三条 本会は史学・関連諸科学および、歴史・地理教育の研究とその発展に寄与することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するために左の事業を行なう。

一、研究会

二、大会

三、総会

四、機関誌等の発行

五、その他必要と認められる事業

第五条 本会は本会の趣旨に賛同するものをもって、会員とする。

2 会員は、本会の事業に参加し、機関誌の配布をうけ、機関誌への投稿その他研究に関する便宜を受けることができる。

第六条 本会は左の役員を置く。

会長 一名 委員 若干名 監事 二名

第七条 役員は会員の中から選出し、総会の承認を得るものとする。

第八条 役員の任期は原則として二年とする。

第九条 本会の経費は会費、寄付金およびその他の収入をもってこれにあてる。

2 会計年度は、四月一日より翌年の三月三十一日までとする。

3 本会の予・決算は監事の監査および総会の承認を得るものとする。

第十条 会則の改正は総会の議決による。